

カリフォルニアの風（5月増刊号）

「書くこと」

新緑の季節を迎え、芽吹いた若葉を太陽が照らしています。

新学期が始まって、早くもひと月が経ちました。

今日は、子どもたちが、新しい学級での生活に適應できているだろうか、と思いながら校内を見えています。新しいメンバーで人間関係ができてきたでしょうか。新1年生、幼稚部の子どもたちは、急激な変化の中でのスタートなので特に見ておきたいと思っています。また、登下校時、休み時間や昼食時にはできるかぎり話しかけ、その反応を見て、併せて、授業を楽しんでいるだろうか、と気になって見えています。

お家の人にも自らの目で確かめていただきたい。その思いから、学校生活参観日を設けました。その1回目、幼稚部・小学部は先日終え、中高部はこの週末に予定しています。多くの方の参観をお待ちしています。

さて、子どもたちを見ていると、みんなで楽しく学んでいると実感しています。その姿は、若葉一枚一枚が太陽の光で輝くように、光を発しているからです。子どもたちは輝いています。先生たちは、どうだろうかと見ていると、張り切っています。子どもたちと同じくらい輝いているように見えます。

子どもたちが喜ぶ、先生たちもその様子を見て喜ぶ、お家の人はお子さんの成長ぶりを喜ぶ、三者が喜ぶ学校づくりに努めてまいりたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、幼小部の学校生活参観日の感想に、「グループ活動や、書くことがある授業はよかった」という内容を複数いただきました。今年から、学校の教育目標達成に向け、「対話」を入れた授業に取り組んでいます。早速、その様子をご覧いただき、感想をお寄せいただきましたこと、うれしく思います。

対話に向かうには、自分の考えがなければなりません。周りの仲間の話を聞くことだけでも、学びにはなりますが、自分の考えをもって、仲間の話を聞いて、考えることが自分の考えを深めていくことにつながり、深い学びになっていきます。まずは自力思考が肝心といえます。そのために先生たちは発問を工夫しています。また、考えが深まったかどうかは、時間軸で子どもを見ることを心がけています。授業の始めはこんなことを言っていた子が、終盤になると別の言葉で説明していたという様子です。そのための振り返りの仕方の一つが、「書く」という活動で、その場面も見ていただいたこともうれしく思っています。

ところで、「書く」と「読む」は、どう違うのでしょうか。私は、その違いは、主体性があるかどうかの違いだと考えています。どういう単語、どういうフレーズを使えば、相手にしっかり自分の考えが伝わるのか、「書く」ときは自分で考えなければいけません。

一方、「読む」は、出ているものを受け取る感じになります。「読む力」はもちろん大事ですが、同時に「書く力」を養うことが、主体性をもって表現していく力を付けることになると考えています。「書く」は創り出すものと考えているからです。家庭でも、「書く」ことを頑張っている子どもたちになってもらいたいと願っています。

「母の日」

今月の第2日曜日は、「母の日」でした。

入学式のときに、代表であいさつをしてくれた私たちの「なかま」は、「お母さん、お弁当作りよろしくお願いします」と、いつも支えてくれている両親への感謝の思いを伝えていました。そのなかまのことだから、「ありがとう」の思いを伝えてくれたことと思います。

私には孫が二人います。今年の8月には、3人目が生まれる予定です。私は、日本に帰れば、孫に囲まれ、「じいじ」「じいじ」と呼ばれています。母の日、一つの動画が長女から送られてきました。それは、孫が長女へ、母の日のプレゼントとして、カーネーション一輪を贈っている内容でした。その動画を見ながら、今では「じいじ」の私が、まだ小学生低学年だったころ、姉から数枚の硬貨を手渡され、妹を連れて、生家から5分ほど歩いたところにある花屋に向かったことを思い出しました。持参したお金で買えるカーネーションを分けていただいたこと、花の色は確かピンク色だったことです。買いに行ったことと、色までは記憶にありますが、母にどのような言葉を掛けて渡したのか、皆目思い出すことができません。はにかんだのか、それとも、妹に託したのか、日記にでも書いて残しておけばよかったと後悔しています。

私の母は、現在91歳。妹と姉に身の回りの世話をお願いしています。母は、98歳になる父と二人で暮らしています。父は、長男の私が海外へ行く度、「俺のことは心配するな」「子どもたちのため、思う存分に働いてこい」と、送り出してくれます。そんな両親のことを忘れたことはなく、姉や妹にも感謝する気持ちをいつまでも持ち続けています。「母の日」と聞くと、無性に母に会いたくなります。先ほどの動画、孫が母となった長女にカーネーションを一輪贈る姿は、それが今は直接にはできない私の思いを表してくれているようで、熱いものがこみ上げてきました。

補習校の子どもたち一人ひとりも、ご両親に「いつも送り迎えをしてくれてありがとう」「お弁当をいつも作ってくれてありがとう」など、感謝の気持ちを伝えているにちがいないと思っています。思いを素直に伝えられる、そんな子どもたちを、ともに育てていきたいと思っています。

今後とも学校教育へのご理解とご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。